

600 キロの自転車の旅を経て、ようやくドブロブニクに着いた。

日本人にはあまり馴染みのない街だが、ヨーロッパでは実に有名である。

夏には、ヨーロッパ中からの観光客であふれていると聞いた。実際に来てみたら、やっぱりおびただしい、人、人、人。

【SOBE】と書いてある幾つかの宿に直接行って見たが空きがない。3 軒のツーリストでも宿がないか聞いたが満室という。バスターミナルにも 20 分ほど立ち尽くしてみたが、全く声が掛からない。冬には逆に、客引きであふれているというにどうしたことか。こりゃ困った。本当に宿が無いぞ。

昨日はボスニア・ヘルツェゴビナで野宿したので早くシャワーを浴びたいところだ。

通りにはバスターミナルもあって、団体客が降りてくる。こっちは汗まみれTシャツ、短パン、ビーチサンダルなのに、綺麗な洋服でばっちり決めて涼しげに皆で談笑していやがる。その内、私に気づいて、たくさんの哀れみな視線が私に集まる。

くっそう、この人たち、それぞれに今夜ベッドがあるんだろうな(当たり前だ)。

でも高級観光客どもよ、その首から下げているカメラは、キャノンやオリンパスじゃないか。

ふっふっふっ、何を隠そう、密かにこんななりをしているが、実はその超ハイテク国家日本から来ているんだぞ、俺は。

自慢げに見返してやると、その先には J T B と書かれた旗をもった女性がいた。

4 軒目のツーリストに行き、ようやく 1 軒アレンジしてもらった。オールドタウンと呼ばれる、城壁に囲まれた旧市街にその宿はあるらしい。しかもそのツーリストから歩いて 5 分という。ラッキーだ。

と思ったのは間違いだった。まっすぐ行くには 200 段近い急な階段があって、自転車では全く登れない。

このオールドタウンは、頑強な城壁に囲まれた土地なのだが、広場こそ海岸沿にあるものの、山に向かって住宅エリアが広がっている。

その宿は城壁に最も近いところにあるのだった。



狭い露地が 24 本ある。階段は 200 近い。階段のはるか上空には洗濯物が干してあったりする。

ラスムッセンさんご夫妻

自転車で城壁の外を大迂回する。裏口からオールドタウン内に入り直し宿の場所まで何とかたどり着いた。一旦街に着いたら便利な自転車、と思っていたが、ここではそうではないらしい。

住宅エリアは狭い露地が 24 本あって、どれも 1.5 ~ 2.5 メートル程度の幅である。宿がある露地はことさら狭いので自転車が置けない。

だからと言って観光客が通る城壁の内側に立てかけるのも良くないだろう。写真撮影している人には興ざめだ。

置き場に困っていると、城内の一番外側に家を構えているご夫婦が買い物から帰ってきたところで、『ここに置いてもいいよ』と家の前のスペースを貸してくれた。

そのみならず、何か飲んでいく、と声を掛けてくれる。ラスムッセンさんご夫妻である。

その家は3階建ての構造になっていた。その3階に連れていってもらう。

大きなバルコニーの扉を開けると、何とオールドタウンが一望できる最高の場所だった。30クナ(555円)払って城壁に登った時の景色と全く同じである。そよ風も吹いて実に気持ちがいい。

そんな部屋で1時間ぐらい、いろんな話をした。自転車でクロアチアを横断してきたこと。予想外にとんでもなくたいへんだったこと。

よく聞くと、二人が住んでいるのはコペンハーゲンだという。つまりこの家は別荘。

ご主人は、映像とアートのコンサルタント会社を営んでいるそうだ。奥様は、コペンハーゲンにあるクロアチア大使館に勤めている。奥様の方は、クロアチア人なのである。

そんな彼女に、クロアチアの道路事情はどうか、という問い合わせがデンマーク人からたまにあるらしい。デンマークでも自転車がとても盛んらしい。

でも彼女はいつも『アップダウンがすごいわよ、道もデンマークほど整備されていないし。やめろとは言わないけどね』とアドバイスしてあげるそうだ。確かにそうだ。

どうりでクロアチアを走るチャリダーが少ない訳だ。

ご主人はその道では有名な人なんだそうだ。本のエディターもしている。

デンマークでは普通、年間5週間休みが取れるらしい。彼の場合には経営者だから自由がきく。

この別荘にはわりと頻繁に二人で来るとのこと。彼はたまにここで仕事をするのだそうだ。

今回の滞在は4週間。飛行機でザクレブ経由で来る。若い頃は車で来たらしいが、車だと3日程度掛かると(デンマークから2000キロ以上らしい)。

『日本人は一週間ぐらいの休みしかとれないからバタバタと動き回るのだけど、4週間となると一体どんな過ごし方をするの』と聞いてみると、ドロブニクの夏は音楽祭が行われているし、友人などもたくさん来るという事だった。全く退屈しないらしい。

確かに、このバルコニーでビールを飲みながら本でも読んで、時々うたた寝していたら、あっという間に時が過ぎそうだ。

『将来、もし私が金持ちになったら、となりの家を買いますよ』と冗談を言うと、クロアチアでは外国人は土地を買えない法律があると。



ラスムッセンさんのバルコニーからみた旧市街。城内ではこの家から見た景色が一番だと思う。

『クロアチア人と結婚すれば買えるわよ、どお?』と奥様。この別荘も奥様名義になっているらしい。

彼らは、彼女が 17 才、彼が 20 才の時に何かのサマースクール知り会って、大学を卒業してから結婚した。知り会ってしばらくはペンフレンドだったそうだ。その時にはまだ、彼女はデンマーク語が出来なかったが今はできると。

彼女は、自分はとてもラッキーと言っていた。お二人の息子は現在、軍のパイロットをしていると。

とても幸せそうで、パーフェクトライフって感じだ。

ドブロブニクの Altstadt

クロアチアに留学していた会社の先輩にメールを打ったところ返事が返って来て、『魚介類がうまいぞ、伊勢海老もあるし』ということだった。

でもドブロブニク、物価が飛び切り高いのだ。ランチにサンドイッチにビールを頼むとそれだけで 30 クナ(555 円)。夜に至っては、貧乏旅行者は来るなっていう料金設定である。

料理はほどほどに押さえつつ、雰囲気だけは満喫しながらのディナーとなった。



旧市街のメインストリート。カフェテリアがいい感じで並んでいる。夜は夜ですごい賑わい。

ドブロブニクの宿

ツーリストに紹介してもらった宿の料金はツーリストの手数料込みで 197 クナ(3645 円)。冬にはこの半額になるとはいえ、ちょっと高い。

露地が狭いので、通りを挟んだお隣には、ジャンプすれば二階の窓から窓へ入れそう。夜にはその家の人寝ている鼾が聞こえる。時々観光客がハアハア言いながら登ってくる息遣いも聞こえる。のどかなあ。

そんな狭い露地には、滑車を使ってロープを張り、高い位置に洗濯物を干す。ツール・ド・クロアチアの間も、そこそこ手洗いで洗濯していたが、毎日へとへとだったので、汗臭くなきゃいいという程度に手を抜いていたのだが、すごくきれいに洗われた洗濯物が、ドブロブニクの露地に大量に私の洗濯物が干してあるのを見て何だか可笑しく、また恥ずかしかったりする。

イタリア/バリへ

イタリア行きのフェリーは、ドブロブニクから週に 4 便出ている。しかし土日の船は満席で、月曜日まで待っているとオリンピックのソフトボールが見られなくなるので、慌てて水曜日のチケットを取った。あれほど目指せドブロブニク!と必死で漕いできたのに、ドブロブニクには 1.5 日の滞在になってしまった。

フェリーは 23 時発。21 時には港に行っていたのに、自転車を持っていた為フェリーの前でやたらと待たされ、結局最後の方になってしまった。

他の客たちは、急ぎ足で船に乗り込もうと私の前を通りすぎる。中には走っている人もいる。電車のドアが開くと、ガキが飛び乗って座席を確保するのに似ている。そして確保した後は勝ち誇ったように立っている人を見ていたりする。

イタリア人なのか、クロアチア人なのか知らないが、とてもよく似ているぞお前ら。

私のチケットはもちろん一番安いデッキ(甲板)なので、寝る為の場所を確保したかったのだがそんな訳で失敗。もうデッキのあらゆるところはことごとく取られている。中にはトイレの前に寝ている人もいる。

クロアチアのフェリーは、高いくせに何だか小汚く、まるで難民船の様な印象を受けた。因みに329クナ(6087円)

私は結局、通路に寝ることに。しかも通路の外側。フェンスはあるものの、鉄棒が3本走っているだけで、仰向けに寝て、もしそのまま体をずらすと海に落ちるという場所である。まあ寝返りの場合は鉄棒に肩が当たるだろうからまあいいか。

買っておいたワインをがぶ飲みして寝袋にくるまって寝た。

初イタリア

翌日、起きると7時で、既にフェリーはバリというイタリアの港に入っていた。他の客は既に出発準備を整えていて、どうやら一番最後まで寝ていたようだ。なんだどこでも寝れるんじゃない私。

バリは結構大きな港町である。

国際航路も幾つかあって、ギリシャ、アルバニア、クロアチアなどへ向かう船がたくさん行き来している。さすがユーロの国。パスポートチェックは簡単。スタンプもなし。



- 1.面積 : 30.1 万 km² (日本の約 5 分の 4)
- 2.人口 : 5,784 万人 (2001 年)
- 3.首都 : ローマ
- 4.民族 : 歴史的に諸民族が混合しており、明確に定義できないが、中心は地中海人種。
- 5.言語 : イタリア語 (地域により独、仏語等少数言語あり)
- 6.宗教 : キリスト教 (カトリック) が国民の約 97%。

その他、プロテスタント、ユダヤ教、イスラム教、仏教。



- 7.略史 1861.3. ヴィットーリオ・エマヌエーレⅡ世、イタリア王国建設。
1922.11. ファシスト党ムッソリーニ政権掌握。
1943.7. ムッソリーニ政権崩壊。
1946.6. 国民投票で王制廃止。
1948.1. 共和国憲法施行。
1994.4. キリスト教民主党中軸の戦後政治の終焉。

日本人は特にイタリア好きと聞く。NHKの語学講座は、イタリア語を話す総人口が世界では少ない割にたくさんの視聴者がいるそうだし、旅行のガイドブック“イタリア編”は大抵厚い。地球の歩き方もけっこう厚くて、ツール・ド・クロアチアの途中で本当に捨てるかと思ったほど。しかもいち早くギリシャに行かなきゃいけないので、今夜のフェリーに乗ってギリシャに行く事にした。

このパリの街にいるのは、たったの9時間。ガイドブックにして2ページである。もってこなさな良かった。

パリという街

ギリシャ行きのターミナルは別の場所にあるようだ。自転車で移動。400メートルぐらい離れているが、自転車があると、荷物を背中に背負う必要はない、移動が早くて楽、気持ちいいという点で無茶苦茶いいのもだと自転車を見直した。ポロ自転車が可愛く見える。

ターミナルに着き確認すると、ギリシャ行き切符販売開始は9時からだというので、まずはちょっと離れた銀行へ。そして再びターミナルへ。やっぱり便利だ、自転車って。

因みに、アドリア海を漕ぐ、という目的は達成したし、故障してしまって乗りにくいのだが、ヨーロッパのフェリーはどこでも自転車は無料らしい。無料なら荷物を運ぶリアカー的に使えばいいのでクロアチアから持ってきたのだった。

自転車なのでそのままパリの街を散策する事に。自転車って得だ。

旧市街の細い道を自転車でぐるぐる回る。自転車っていいなあ。

たった9時間のイタリアである。

イタリアといえばピザとスパゲティ(日本と言えば、寿司にてんぷらに牛丼というのに近いほどの短絡的発想であるが...)。だから今日はなかなか忙しい。

ピザかスパゲッティを食べたくて店を探したが、空いているのはどこもコーヒーとお菓子の店。レストランはまだやってない。午前中だからだろうけど、それよりも気になるのは、街全体が今一つ死んでいる感じ。閉まっているお店が多いのと、労働層が働いていない。露地でだらだらとたむろしている。今日は祝日かと思うほど。

陽気で活発なイタリアのイメージが少し狂ったが、きっとみんなサマーバケーションに出てしまっているのだろうな。

昼過ぎの時間には車さえ走らず、一気に休日の雰囲気。もうゴーストタウンの様だった。

駅前少し賑やかで、ここでピザを食べた。でかいピザが1.7ユーロ(235円)。この店は、近くのお店と比較すると半額くらいと、とても安い。

40分も待たされたが、おかげで焼き立てのピザ。とてもうまい。さすがイタリア。

時間があつたのでアドリア海で泳ぐことに。
クロアチアでは毎日海を見ていたのだが、泳ぐ
時間も気力もなかったのが嬉しい。
今日は天気良く、海岸にいと暑い、水は冷
たくとても気持ちがいい。



この日はとても暑かったので、平日にも関わらずたくさんの人が海岸に集まってきた。

海岸には女性も多い。

アメリカ人らしき女性をイタリア人が口説いて
いる。イタリア人って、噂通りなんだ。
思いっきり無茶苦茶な英語で、でも褒めちぎる
言葉の語彙は豊富。男は根っからエンターテイ
ンメントって感じで、関西人を連想させる。

女性のアメリカ人はとてもいい気分みたいで満足げ。イタリアって、女性旅行者はさらに楽しい
んだろうなあ。

レストランを探す。ちょっと高級そうなところに入った。

Tシャツ、短パン、ビーチサンダルという汚い格好だったが歓迎してもらえた。まだ客の来ない
早い時間だったからかもしれない。

スパゲティだけ食いたい、というメニューにはなかったがシーフードスパゲティを作ろうとい
ってくる。

スパゲティだけ、といていたのに、まずいろいろな種類のパンがバスケットに入れて出てきた。
さらに出てきたのがピザによく似たフォーカッチャ。イタリア人に聞くとピザの起源はイタリア
だが、フォーカッチャは似たようなのがヨーロッパ至るところにあるので何とも言えない、と言っ
ていた。

どこが起源であれ、このお店のフォーカッチャがまた無茶苦茶美味かった。

思わず勧められるままワインを注文した。う~ん、商売上手。

さらにちょっとしたパンのお菓子の様なものを出してきた。でも甘くはない。そしてこれはサー
ビスだと言う。

そしていよいよ出てきたシーフードスパゲティ。
もう私にとっては完全にフルコースのメインに
なっている。

これがもう無茶苦茶美味くて感動。イタリア文
化圏のクロアチアでスパゲティを3度食べて、
3度ともまずかったから、イタリアでまずかっ
たらどうしようと思っていたのだが、本当に美
味かった。

日本でも美味しいスパゲティを出す店が多いが、
あれはイタリアで修行しているんだろうな。ク



最高に美味しいシーフードスパゲティを堪能した。さすがイタリア。日本女性に人気があるのもうなずける。

ロアチアの料理人も見習って欲しいものだ。

イタリア人に言わせると、クロアチアもギリシャもパスタの質がイタリアのものとは全然違うらしい。さらにあるイタリア人に至っては、『ギリシャのやつは、イタリアのパスタを高く買って買えないから』などと言っていた。さすがにそうは思わないけど。

ギリシャへ

フェリーに乗り込む。昨日のクロアチアフェリーの様なややこしい手続きや待ち時間が一切なく、問題なくすぐに乗船できた。

何だか今日のフェリーは豪華そう。何といっても、68ユーロ(9384円)もする。これに乗ると、予算的には何日も食事にありつけない、カロリーはビールから取らざるを得ない、という金額である。

フェリーに一歩足を踏み入ると、いきなりエスカレーターがある。

十数名ものホテルマンが制服を来て、整列している。

もうほとんどホテルだった。

回りを見渡すと、昨日のフェリーではあまり違和感の無かったTシャツ、短パン、ビーチサンダルが、今日は何だか違うぞ。

ポケットにしまったパスポートを取り出し、何気にJAPANと書いてある表紙を見える様にして彼らの前を通過する。

フェリーにはカジノあり、レストランあり、プールあり。トイレもすごくきれい。シャワー室も完備。何とインターネットコーナーまである。

昨日のクロアチアのフェリーでは、パサパサのパンにチーズを挟んだだけというまずいサンドイッチとビールで600円近かったのが、このフェリーに乗る前にスーパーで食料を買っていたのだが、豪華なフェリーの割に各レストランの価格は控えめな料金設定だった。カフェテリア方式の価格に至っては、バリの街のレストランよりはるかに安い。

出港まで時間もあるので、テレビでオリンピックを見る為にバーへ。ここでドイツ人やオースト



10階建ての超高級フェリー。クロアチア船と違いギリシャ船は実に快適に作ってある。



なっとなっ何と船の中にカジノ。噂には聞いた事があったが、そんなフェリーに乗るチャンスなどないと思っていた。

ラリア人と一緒に観戦。何だかとてもリッチな気分だ。

初ギリシャ

クロアチアフェリーの様に混んではおらず、またデッキの客にも実に快適に出来ていた。

4 人掛けのイスに寝転がって寝ることに。ここにはデッキという割に天井もあって雨の心配もない(今はめったに降らないけど)。ましてや海に落ちる心配は全く不要だ。

快適な航海で、あっという間にギリシャの港町、パトラスに着いた。

- 1.面積 : 13 万 km² (日本の約 3 分の 1)
- 2.人口 : 1,094 万人
- 3.首都 : アテネ (人口約 300 万人)
- 4.人種 : ギリシャ人
- 5.言語 : 現代ギリシャ語
- 6.宗教 : ギリシャ正教
- 7.略史 : 紀元前 8 世紀、古代オリンピック開催
1896 年、近代オリンピック開催
2004 年、アテネオリンピック開催



ギリシャの港でもパスポートコントロールは一切なし。
自転車でホテルを目指す。結構な距離だったので、再び自転車大活躍。

パトラスのホテルの 1 泊料金は 10 ユーロ(1380 円)だった。まあこの程度ならやむ無しだろう。オリンピック期間中分を一気に払った。これで宿の心配は要らない。

さて、いよいよ明日からオリンピックである。

つづいた